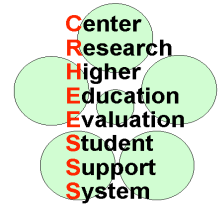


# 週刊センターニュース

No.338

第338号(2010年12月21日) 毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: <http://www.rche-kanazawa-u.jp/>



## ○●○「グローバル社会を生き抜くということ」

### ～2010年度第4回名古屋社会心理学研究会参加報告から ○●○

以前、茂木健一郎氏の講演で、「地球規模で活躍できる人材の条件」について触れられていたことを報告したが、今回参加した、2010年度第4回名古屋社会心理学研究会「心の文化差に対する社会生態学的アプローチ—人間の多様性から普遍性を考える」(結城雅樹、北海道大学)でも、グローバル社会を生き抜くことが困難な理由について触れられており、茂木氏の主張にも通じる部分があったので、ここに紹介したい。

以前にも紹介したが、茂木氏は、ますますグローバル化の進む時代にあって、これからは地球規模で活躍できる人材の養成が急務であることを主張している。そうした人材の条件のひとつに、「恐れることなく外の世界に飛び出していき、そこで多様な他者とのつながりを構築できること」をあげた。こうして他者との関係性を構築することで、新しいビジネスを生み出し、利益をあげることで雇用が創出され、関連産業が生まれれば、経済活動が活発化して雇用問題も不況も解決できるという考えである。

ところが、これを一個人の適応についての問題として考えると話は別である。そもそも、このように、世界中の人と関係性を構築できるだけの人材になりうる人間が極めて少数である。そして、この要求水準をクリアできたとしても、幸せになれるとは限らないのだ。結城氏の講演は、その現実を突きつけてもいる。

グローバル化している世界は、結城氏の研究の文脈では「高関係流動性社会」ととらえられている。これは、新たな他者や集団との出会いの機会や選択の機会が豊富で、対人関係の自由取引市場のようなものと説明されている。それに対して、低関係流動性社会とは、対人関係や集団所属性が安定した社会で、対人関係は系列取引市場のようなものである。これらの社会環境下で、自尊心が幸福感を規定する強さを比較した場合、高関係流動性社会の方が、自尊心の幸福感規定力が強いことが一連の研究で示されたことが、今回の主な発表内容であった。

心理学領域において、自尊心は自己に対する肯定的な評価の指標とされており、自尊心が自己の魅力や望ましさに対する認知を反映していると考えられている。結城氏の説明によれば、高関係流動性社会では、人々は常に多くの他者、集団と接触する機会を持っているので、それだけ魅力的な人に出会うことが可能である。このような状況では、魅力的な人と関係を構築したいと多くの人が感じるため、望ましい人や望ましい集団のところにも多くの人が集う一方で、魅力のない人、すなわち市場価値の低い人は選択されないことになる。したがって、高関係流動性社会においては自尊心が自己の市場価値に対する認知となって、幸福感を強く規定するのに対し、低関係流動性社会では対人関係が安定

的であるために個人の市場価値が幸福感に対してあまり意味を持たず、むしろ現在の対人関係の良さが重要になるということである。

この研究の知見をもとに考えると、グローバル化する世界の中で、世界に飛び出していくことがいかに個人にとって困難であるかがわかる。低関係流動性社会から高関係流動性社会に移行するとき、人々は突然に自己の市場価値に対する評価に直面せざるを得ない。そして、より広い社会での基準で評価されるため、当然その評価基準は厳しくなる。仮に高関係流動性社会で適応し、成功をいったん収めて幸福感を勝ち得たとしても、幸福感を一定して高い水準に保とうとすれば、厳しい基準に照らし合わせての価値ある自分であり続けることが常に求められる。そのために必要な努力は並大抵ではないし、精神的な負担も大きいことも十分予想される。

ここまでくると、「グローバル社会で通用する人材」になれるのは非常に限られた人間であることは明白であり、すべての人にこの基準を要求することが荒唐無稽な試みであることがわかるだろう。基準をそもそもクリアできない人間、自己の市場価値を高いままに維持できない人間は、自分が落伍者であることを感じざるをえない。そうした思いをしてまで「グローバルな人材になりたい」とすべての学生が考えるだろうか？ そうなりたいと思わない学生が、そうなれるだけの資質が見込めない学生が、高い基準を厳しく要求されたとき、どうなるだろう？

「グローバルな人材の育成」を教育目標に掲げるのが時代の流れではあるが、その実現可能性と個人にとっての適応を考えれば、実は軽々しく掲げられる目標とはいえないだろう。学生が卒業後に国際社会に仮に出たとして、大学で「グローバルな人材になるために必要」とされて求められてクリアした水準が、とても通用しないものであるという現実直面したとしたら、それは大学の落ち度といわれても仕方ない。

それでも、「グローバルな人材」になることを学生に求めるか、そうなれるだけの教育が実現できているのか、立ち止まって考える必要があるのではないだろうか。

(文責 大学教育開発・支援センター博士研究員 尾関美喜)

## ○●○アカンサス FD にて FD 関連情報を掲載しています。○●○

アカンサスポータルにて FD 活動に関する研究、他大学の実践、セミナーなどの情報を掲示しています。「厳格な成績評価」や「TA 活用」を中心に情報を充実化させておりますので、皆様の FD 活動にご活用いただければ幸いです。アカンサスポータルの時間割内にある、「その他情報」の「時間割」リンクをクリックしていただきまして、「アカンサス FD」をクリックしていただきますと、本センターが蓄積しました FD に関する情報をご覧いただけます。今後、本学の直近の FD 課題、活動に関する話題を中心に掲載していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

## ○●○他大学の教育関連資料について○●○

大学教育開発・支援センターに、全国の大学、大学教育センター、関連の独立行政法人等から各種報告書が届いております。資料は、センター図書室（総合教育1号館6階613室）に所蔵しております。お貸しすることができますので、ご覧ください。